1.触手の襲来

都会の喧騒から少し離れた場所に立つ一軒のアパートメント。その一室に暮らすハルトは、大学を終えて新たな人生の門出を迎えていた。しかし、彼の心には微かな悩みがあった。それは、毎晩繰り返される奇妙な夢。その夢の中で、彼は何者かに絡まれ、縛られ、そして喘ぎ声を上げる。夢の内容は常に同じで、その相手は黒光りする無数の触手だった。

「なんでこんな夢を見るんだろう…」

ハルトはその夢に困惑しつつも、それを他人に話すことはできなかった。そしてある日、その夢が現実となる出来事が起きる。

彼が帰宅すると、部屋の中には見知らぬ生物が。それは黒光りする触手、無数に伸びたそれが部屋中を這い回っていた。彼が見るところどこでも、触手は壁を這い上り、床を這い下り、家具を滑り落ち、まるで生きている黒い蛇のように部屋を埋め尽くしていた。

「何だこれは…！」

彼が驚愕の声を上げると、触手はさらに彼に絡みつき始める。まるで獲物を捕らえる蛇のように、触手はハルトの体を絡め取り、動けなくする。その冷たくヌルヌルとした触感が彼の体を這い上がる。

「くっ…、離せ…！」

しかし、彼の叫びは無視され、触手は彼の体を更に絡め取る。彼の抵抗も虚しく、触手は彼を完全に捕らえてしまった。

2.肛門への侵入

「やめてくれ…！」
叫び声を上げるが、触手たちは俺の声に反応するどころか、一層激しく俺の服を引き裂いた。
「くっ…、何を…」
俺の全裸の身体が露わになると、一部の触手は俺の肛門に向かい、その入り口を撫でるように這い上がった。
「あっ、やめてくれ…！」
叫ぶ俺だが、触手は俺の声に反応することなく、ゆっくりと肛門に侵入していく。
「んっ、あっ…！」
初めての感触に俺の身体が固まる。しかし、それを良いことに、触手は肛門をゆっくりと広げ、さらに奥へと進入していった。
「あっ、くっ…！」
その動きに合わせて、俺の身体は自然と反応し、思わず喘ぎ声が漏れ出た。それは恥ずかしさと快感が混じり合った、甘美な声だった。
触手が俺の体内で小刻みに震え始めると、俺の体は新たな快感に襲われた。
「なんだコレ！？気持ちいいぃっ！！」
思わず声を上げる俺。その快感に俺の思考は完全に奪われ、俺はただひたすらに快楽に溺れていった。
触手の動きがさらに激しくなり始めた。俺の体内で脈動を始め、熱い何かを注ぎ込み始めた。
「あっ、あああっ！」
その瞬間、俺の体はさらに強烈な快感に襲われた。俺の体内に注がれたそれは、触手からのザーメンだった。俺の体内を満たすその感触に、俺はさらに喘ぎ声を上げた。
「ああっ、なんだこれっ！？」
それは俺にとって未知の快感で、俺はその感覚に戸惑いつつも、その快楽を味わい続けた。俺の体はその快感に反応し、俺のおちんちんは更に硬くなり、最終的には自身も大量の精液を床へと放出した。

3.変身の中間地点

その快感から解放された時、俺の胸が膨らんでいることに気づいた。
「なんで、こんな…」
俺の肛門は触手によって広げられ、侵略され、そして、俺の体は女性化していた。しかし、おちんちんはまだ残っていた。それはまだ男性であることを示していた。そこに新たに一本の触手が現れた。それを見た俺は恐怖した。その太さは他のものより大きく、それが自分の体に挿入されることを想像すると恐ろしかったのだ。触手の先端からは白い液体が溢れ出した。
「えっ……？」
困惑する俺だったが、触手はその先端から溢れる粘液を俺の口元へ運び、俺の顔を汚し始めた。
「うぷっ！何だよコレ……！」
その正体は、触手の持つ性器であり、その射精は絶頂を迎えたことを意味していた。その行動の意味を理解した俺は、思わず顔が青ざめた。
「まさか……！」
そう言うと、その言葉通り、その触手は自らの性を俺にぶつけてきた。
「むぐぅ！」
触手は強引に俺の口をこじ開け、口内に侵入する。同時に喉の奥まで突き上げられ、呼吸すらままならない状態になった。そしてそのまま触手は前後に動き始め、俺の口を犯し始めた。
「んっ、ぐう……！」
苦しそうな表情を浮かべる俺だが、触手はそれを意にも介さず、そのピストン運動を続ける。やがて、触手の肉棒は震えだし、再びあの熱を持ったものが放出された。
「んぶっ！！んん〜！！！」
俺はその行為に抵抗するが、触手はそんなことは関係なしに、二度目の中出しを行った。俺の口から触手が引き抜かれると、その反動で、白濁液が俺の身体に飛び散った。
そして、俺の口の中は触手のザーメンで満たされていた。それは塩辛く、鼻を突くような臭いがした。それは、俺が今まで味わったことのないような味で、その感触に俺はさらに絶望を覚えた。

4.完全なる女性化

そして、俺は自分の身体に更に異変が起こっていることに気づいた。
「えっ…、何だこれは…」
俺のおちんちんが縮んでいくのを感じた。それは、男性としての最後の証が消えていく瞬間だった。
「やめてくれ……！」
男性としての自我が消失する恐怖。それは、身体の変化以上に、俺の心を苦しめた。
しかし、俺の胸はより一層膨らみ、俺の髪はさらに柔らかさと光沢を増してロングヘアーに急速に伸びていき、完全に女性化し、触手の子孫を産む器と化していた。
「いやだ、こんなの…」
絶望が俺の心を満たしていた。しかし、それでも触手は俺の体を犯し続けていた。
その中でも一本の触手が特に太く、その動きが俺の体に新たな恐怖を植え付けた。
「えっ…？」
それは、俺の膣へと向かっていた。触手が俺の膣に触れると、その触感に俺は思わず体を震わせた。
「んっ、やめてくれ…！」
しかし、触手は俺の声を無視し、ゆっくりと俺の膣に侵入していった。その侵入感に、俺は思わず声を上げた。
「ああっ！ダメ、ダメぇっ！」
触手が俺の膣内を這い上がると、その感触に俺は再び快感を覚え、思わず声を上げた。
「あっ、ああっ！気持ちいいぃっ！」
俺の体はその快感に敏感に反応した。
触手が子宮の中まで到達し、その刺激にまたもや体を震わせると、触手はゆっくりと動き始める。それと同時に、今まで感じたことの無い快感が全身を駆け巡った。
「あああっ！すごいぃっ！」
その快感に、俺は思わず声を上げてしまう。そして、触手は大量の熱い精液を吐き出した。
「あっ、あああっ！」
その瞬間、俺の体がビクンと跳ね、その快感で、ついに俺はイってしまった。

5.産みの悦び

俺の体内に注がれる熱い液体の感覚。その瞬間、俺は熱い何かが体内に注がれ、体全体が震えていることを感じた。それは触手が俺の子宮に精液を注ぎ込んでいることを示していた。その感覚に、俺は思わず体を震わせ、高まる快感に声を上げてしまった。

「えっ…、これは…」

その後、しばらくしてから、俺は自分の身体に新たな変化が起こっていることに気づいた。それは、お腹が大きく膨らんでいく感覚だった。俺は驚きながらも、その新たな感覚を自分の中で確認していた。

「ああっ、これは…」

その感覚を確認してから、俺は自分のお腹をゆっくりと見つめた。そのお腹は、普通の男性のそれとは明らかに異なり、大きく膨らんでいた。それは、俺が触手の子供を孕んでいることを示していた。

「まさか、こんなことに…」

その事実を受け入れることができず、一瞬、俺は混乱した。しかし、それでも俺の体は変化を止めることはなく、お腹はさらに大きく膨らみ続けた。そして、ついに俺は触手の子供を出産する瞬間を迎えた。

「んっ、くっ…！」

その瞬間、出産には通常痛みが伴うはずだが、俺は痛みを一切感じなかった。代わりに、全身を包む甘美な快感が俺を襲った。それは触手の精液が俺の体内に作用し、出産の痛みを快感に変えていたのだ。

「ああぁっ！イクゥッ！！」

そう叫ぶと同時に、俺のおまんこから勢いよく触手の子が飛び出してきた。その衝撃に、俺は絶頂を迎えてしまった。その瞬間、俺は自分が触手の子を産んだことを実感し、混乱と同時に、ある種の達成感を感じた。